

九月
平成二十六年
自主公演能

とき

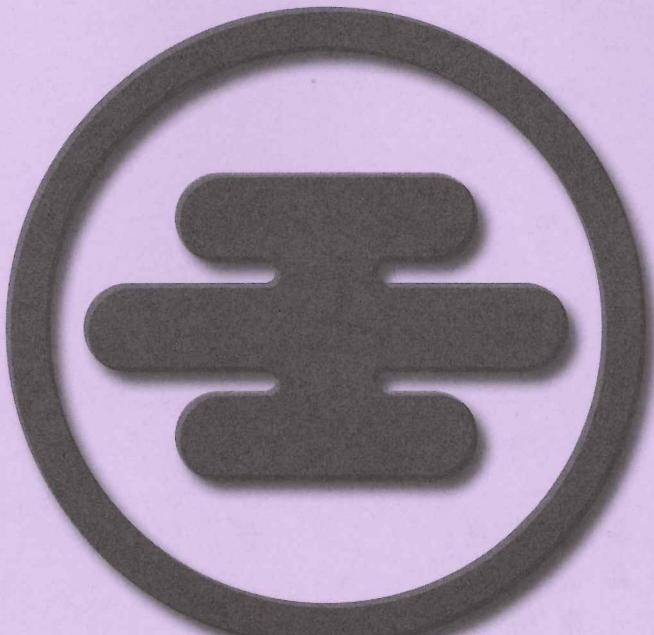
平成二十六年九月二十八日(日)正午始

(整理券配布・十時三十分、

見所入場・十一時、解説・十一時十五分)

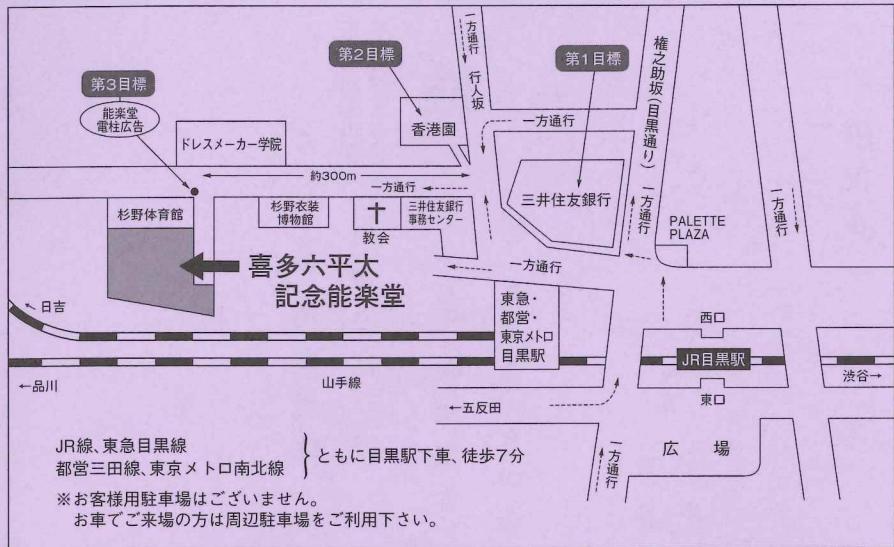
ところ

十四世喜多六平太記念能楽堂



喜多流職分会

【会場案内図】



主催 喜多流職分会
後援 公益財団法人 十四世六平太記念財団
〒141-0021 東京都品川区上大崎四一六一九
十四世喜多六平太記念能楽堂
電話(03)3491-1881-3
テックス(03)3491-18999

≪チケットのご案内≫

九月チケット発売開始日

平成二十六年八月二十四日(日) 午前十時より

年間優待券

- 一枚綴り 五〇、〇〇〇円

- 五枚綴り 一五、〇〇〇円

優待券は各職分でも受付をしております。

前売券

- 一般券 六、〇〇〇円

- 学生券 二、五〇〇円

- 学生団体(二〇名以上) 二、〇〇〇円

指定席料 二、五〇〇円

当日券

- 一般券 六、〇〇〇円

- 学生券 二、五〇〇円

≪お取扱い≫

窓口とお電話にて承っております。

(FAX及びメールでのお申し込みは
お受けしておりません。)

十四世喜多六平太記念能楽堂事務局
(電話)〇三一三四九一一八八一三
(午前十時～午後六時)

【ご注意】

*喜多流職分会の許可なき写真・ビデオ撮影、及び録音はできません。また演能の妨げや他のお客様の迷惑になる行為もご遠慮ください。時計のアラームや携帯電話の電源は必ずお切りください。なお、迷惑行為を発見した場合や係員の指示に従つていただけない時は退場していただく事もございますのでご了承ください。

*2階ラウンジ以外でのご飲食は固くお断り致します。

*自主公演当日は午前10時30分より「整理券」(お一人様一枚)をお配りし、午前11時より整理券番号順に見所へ入場していただきます。

*チケットは入場前に半券を切り離すと無効になります。

*座席はお一人様席です。入場の際手荷物等でお連れ様の座席を取り置く行為は固くお断り致します。

*公演日によっては、満席になり次第入場をお断りすることもございますので、あしからずご了承ください。

*公演中止の場合を除き、お申込後のチケットの払い戻し、変更、再発行はいたしません。

*やむを得ない都合により出演者が変更になることがございます。

*全館禁煙でございます。屋外喫煙所をご利用ください。

*お客様用駐車場はございません。お車をご来場の方は周辺駐車場をご利用ください。

*貴重品の管理には十分ご注意ください。館内で起きました盗難・紛失につきましては一切責任を負いかねます。

十月チケット発売開始日
平成二十六年九月二十八日(日)
午前十時より

十月自主公演能予告
平成二十六年
十四世喜多六平太記念能楽堂

「松虫」 金子敬一郎
「井筒」 松井彬

「殺生石」 大村定

女体

平成二十六年

十月自主公演能予告

平成二十六年十月二十六日(日) 正午始

十月チケット発売開始日

平成二十六年九月二十八日(日)
午前十時より

仕舞

天鼓

笠井 陸

地謡

栗谷 浩之
狩野 了一
大島 輝久

友枝 真也

能

シテツレ・女御 内田 成信

後シテ・前同人の靈
前シテ・庭掃きの老人

綾

鼓

ワキ・臣下 殿田 謙吉

大鼓

柿原 崇志

太鼓

梶谷 英樹

小鼓

古賀 裕己

笛

中谷 明

アイ・臣下の従者 石田 幸雄

佐藤 阳

谷 大作

大島 輝久

大村 定

栗谷 充雄

栗谷 能夫

塩津 圭介

狩野 了一

地謡

附祝言

(終了予定五時頃)

というので剃髮し、法名も「呂連」と付ける。これを知つた妻は出家を赦さず元へ戻せと騒ぐ。

綾鼓(あやのつづみ)

たちの不運を嘆き互いに慰め合うが、いつしか時も過ぎて名残りは尽きないと言つて再び別れとなつた。

蝉丸(せみまる)

木の丸御殿の庭掃きの老人が、女御の姿を垣間見て恋慕の情を抱いてしまう。臣下が女御の言葉を伝える。「池辺の木に掛けた鼓を打つて、その鼓の聲が皇居に聞こえればもう一度会つてやろう」というのである。老人は喜び、その鼓を見つめ、鼓を打つが「綾」が張られた鼓は当然、音がない。なぶられたと知つた老人は、嘆き悲しみ、池に身を投じて恨み死ぬ。

〈中入〉その噂を聞いた臣下が女御へ伝える。祟りを恐れ池のほとりに顔を出すように勧める。やがて老人の靈が現れて、女御に綾の張られた鼓を打ちたまえと責めさいなむ。鼓は鳴るわけもなく、老人の靈は恨みを残したまま再び池へ消えていくのであった。

《呂蓮(ろれん)》

遠国の僧が諸国行脚を思い立ち、先ず京都へ向かつた。途中で日が暮れたので一夜の宿を乞う。心易く迎え入れられたが、その家の主人が出家したいと言い出す。簡単に出家はできないと断るが、一族皆常々承知だ

藁屋を作つて中に入れて帰つて行くのであった。一方、第三皇女の逆髪はいつの因果の故か、心が乱れて狂人となり髪の毛が逆さまに生えていた。そして狂い彷徨い逢坂山まで来て、路傍の藁屋の中から聞こえてくる琵琶の音により弟の蝉丸と再会する。二人はお互に手を取り合い、自分

の髪をおいて帰る。一人になつた蝉丸は、琵琶を抱えて泣き伏す。そこへ博雅の三位がやつてきて蝉丸を慰め藁屋を作つて中に入れて帰つて行くのであった。一方、第三皇女の逆髪はいつの因果の故か、心が乱れて狂人となり髪の毛が逆さまに生えていた。そして狂い彷徨い逢坂山まで来て、路傍の藁屋の中から聞こえてくる琵琶の音により弟の蝉丸と再会する。二人はお互に手を取り合い、自分